

序

初期研修医の先生は、救急外来で整形外科的な主訴で受診する患者さんを診る機会が多いかと思います。しかしながら診療の際に知っておくべきことは、『適切な診察・診断・手技』、『画像読影のコツ』、『整形外科医にコンサルトすべき症例』、『帰宅後のリハビリや生活指導』などと多岐にわたります。その結果、当院の初期研修医からも、「診断の際、どのような病歴・身体所見に気をつけるべきか知りたい」、「読影しても骨折の有無がわからない」、「整復やシーネ固定がうまくできない」といった声が多く聞かれます。

そこで本増刊号では、初期研修医が救急外来でよく出会う整形外科疾患に自信をもって対応できるよう、“**整形外科診療の基本**”についてできるだけ簡明に記載することを心がけました。

第1章の【総論】は、病歴聴取・身体診察や画像診断のコツ、治療、リハビリなど、整形外科診療全般にわたって重要な内容を解説しています。特に診察技術だけでなく診察するうえでの『心構え』について重点的に記載しています。さらに第1章7には『クレマー対応法』について、第1章8には医事法に規定されている『医師に望まれる行為および品位』についても言及しています。一見「今の俺達には不必要なこと」だと思う御仁がいるかもしれませんが、それらが役立つことがいつか日常診療のなかで出てくると思います。まずは救急外来を受診する患者さんの気持ちや精神的状態を把握して対応することが、不必要なトラブルを回避する第一歩になります。

第2、3章の【各論】は、外傷性疾患と非外傷性疾患とに分けて初期研修医がよく出会う疾患の診察から診断、その後の対応までの流れ（まず何をすべきか、行うべき手技のコツなど）について解説しています。

外傷性疾患では①当日に初期研修医の先生達に最低限実施してもらいたい処置などについて、②緊急性を要するため整形外科医にコンサルトした方がよい疾患などについて、非外傷性疾患では原因が明らかでない疼痛（腰背部痛、関節痛）、発熱そして四肢麻痺などを主訴とした患者さんを診察したときに頭に浮かべるべき整形外科的疾患について記載されています。

ここでの内容は「経験の少ない初期研修医の先生達が画像診断のみに重きをおき、診察や処置が疎かになってしまう場合もある」との声に答えるべく、まずは丁寧な診察を行うことの重要性を伝え、その後読者の方々の気になる画像診断についてしっかり解説し、これらの結果を受けた適切で愛護的な処置・対応のしかたを扱う、というスタンスにしました。

最後に本書の執筆者の構成について書きます。【総論】は編者の高橋が患者さんと良

好な関係を築き不必要なトラブルを回避するための診察方法について記載しました。【各論】は直接研修医を指導する立場にある中堅どころの整形外科医の先生に現場感覚を重視して、初期研修医にぜひ知っていただきたい実践的な内容を中心に執筆してもらいました。これらの先生達は、東京医療センターの現および旧スタッフと以前編者が勤務していた静岡市立清水病院の当時のスタッフであり、私とともに救急外傷を中心に忙しく働いていた仲間達です。

この増刊号を日々の診療の場で役立てていただければ幸いです。

2015年8月

国立病院機構東京医療センター 整形外科
高橋正明